

経 済 民 生 常 任 委 員 会 記 録

平成 30 年 5 月 7 日 (月) 午前 10 時 01 分～午前 10 時 54 分 (9 階 908 会議室)

○出席委員(9名)

委員 長	石原洋三郎	副委員長	誉田 憲孝
委 員	佐々木 優	委 員	後藤 善次
委 員	斎藤 正臣	委 員	黒沢 仁
委 員	佐久間行夫	委 員	山岸 清
委 員	渡辺 敏彦		

○欠席委員(なし)

○市長等部局出席者(なし)

○議 題

「本市農業の 6 次産業化の推進に関する調査」

- (1) 委員長報告について
- (2) その他

午前10時01分 開 議

(石原洋三郎委員長) それでは、ただいまから経済民生常任委員会を開会いたします。

議題は、お手元に配付の印刷物のとおりです。

本市農業の 6 次産業化の推進に関する調査を議題といたします。

初めに、参考人招致意見開陳のまとめについてを議題といたします。

4 月 23 日月曜日に、参考人招致ということで、J A ふくしま未来より、J A ふくしま未来における農業の 6 次産業化推進に向けた取り組みということで、営農部直販課福島地区センター長、菊田浩二様にさまざまなご意見を頂戴いたしました。参考人招致終了後、委員のみで意見開陳いたしましたが、その意見開陳の内容とそれらに基づく委員会のまとめをお手元の資料 1 により確認してまいりたいと思います。

資料 1 をごらんいただければと思います。資料の一番上から簡単に確認していきますと、まず後藤委員からは、商品のブランド化のためのミスピーチの活用という点、また若手農家や女性農業団体への支援が必要なのではという点、さらには水保農村の家のような手軽な加工場を提供していくことの

必要性という意見が出されたかと思えます。

また、黒沢委員からは、いかに多くの農業者が6次産業にかかわってもらい、農業者の手取りをふやしていくかを主にして取り組んでいくことが重要との意見が出されたかと思えます。

次に、渡辺委員からは、よい加工品をつくって、逆に生食を引っ張っていくという考えもあるのではというご意見や、JGAPやHACCPといった食の安全や環境保全に取り組む農場に与えられる認証制度についてのご意見、さらに福島大学との連携による学生の若い力の活用といったご意見があったかと思えます。

次に、山岸委員からも、渡辺委員と同様、よい加工品をつくって、生食を引っ張るという考えについてご意見をいただいたかと思えます。

次に、佐久間委員からは、JAの売れるものをつくるのが大切、調査をした上でリピーターをふやすことが必要といった話についてのご意見や、一方で、6次化商品を産業として取り組むというところまでは至っておらず、生食を中心にJAは取り組んでいるといったご意見があったかと思えます。

また、佐々木委員からは、農家単体が6次化に取り組むことは大変であるという認識がJAにもあったというご意見や、農業者などに6次化に踏み出すためのきっかけをつくってあげることが重要で、資金面をはじめ、マーケティングや衛生管理など一連の6次化の流れを学ぶ機会を市で作り出していくことが大切だと感じたといったご意見があったかと思えます。

次に、斎藤委員からは、大笹生道の駅について、6次化商品をつくっている人たちに対してどのような施設であるべきなのか検討が必要といったご意見があったかと思えます。

次に、菅田副委員長からは、持ち得るJAの有効な情報などは生産者、市とも今後共有していくことが大切といったご意見や、JAがマーケティング調査をできていないということは、農産物に付加価値をつけて、農業者にいいお金で戻してあげようという気持ちが余りないのではという印象も受けたといったご意見もあったかと思えます。

最後に、私であります、JAも一般の方への幅広い案内や6次化の講習会も取り組んでいるとのことであったので、市としても一般の方を対象とした6次化の意識の醸成が大切ということ、水保農村の家のような気軽に試作調理できる施設の拡充なども意識していくことが大切、アレルギー物質に対する対応やラベル表示などは、個別農家にとっては対応が厳しいところもあるため、市としてサポートしていくことも必要ということ、農家が個別に取り組んだ小ロット商品など、できるだけ多くの商品が道の駅などさまざまな場所で売ることができるよう市がサポートをしていくことが必要、そしてミスピーチなどを活用したPR方法なども検討していくことが必要ということを意見として挙げさせていただいております。

以上、簡単にではありますが、意見開陳の概要ということで確認をいたしました。

ここまでで委員の皆様から何かございますでしょうか。

(山岸 清委員) きょうこれ述べられたみんなの意見のとおりなのだけれども、やっぱり佐久間さん

言っていた、つくったものを売るのでなくて、売れるものをつくるというのが大事だというのは大事だね。私、参考人の菊田さんのとき、帰りに清水の直売所に行ったのだ。そしたら、5時で終わっているのだな。あれっ、きょうは休みかなと思ったら、5時なのだな。それはいいのだけれども、その次の日またしつこく行って、今度は5時前に行って、4時ごろから買って帰ってきたのだ。納豆と、あと落花生、あと赤ワイン。ところが、やっぱり赤ワイン、1,600円なのだよ。俺は、ワインは大体1,000円くらいのしか買ったことないのだ。ところが、1,600円だから、普通のワインよりはうまいかと思ったら、だめなのだな。納豆は100円近いのだけれども、大体ヨークベニマルなどで売っているやつのは倍なのだよ。値段が倍で、そしてうまくないのではこれはちょっと、食うやつはうまければ高くたっていいのだよ。だから、落花生の二本松の農家でやっていた、これも800円なのだ。普通中国産だと150円から200円くらいなのだ。だから、3倍か4倍高いのだけれども、これは安心料があるから、味はまあまあだけれども、安心料で、3日かかって食ったのだ。酒のつまみにちょっと殻を割って食うから、800円で3日もつのだ。でも、あのワインはちょっといただけなかった。やっぱりうまくないとだめなのだ、あれは。やっぱり品質、売れるものをつくらないと、そのここらだけが販売所ならいいけれども、みんなほかにベニマルからカワチから何からかにかから店あるのだから、やっぱり競争ということを考えないと、だめだなと思ったな。

(佐久間行夫委員) どのワインなのですか。市内のワインでしょう。

(渡辺敏彦委員) 東和町でつくっている。

(山岸 清委員) 市内ではないのだ。二本松から来たり。だから、やっぱり味考えないと、まず俺、高いワイン、ワインはやっぱり値段によるな。5,000円のやつは5,000円、1万円は1万円だけのことあるけれども、大体1,000円だから、いつも。そして、その赤ワインも1本しか置いてないのだ。俺買ったら完売なのだ。

(後藤善次委員) 保存状態悪いかもしい。

(石原洋三郎委員長) 今山岸委員からは、売れる商品をつくるということが大切ということで、ご意見をいただいたところであります。

ほかございますでしょうか。

(佐久間行夫委員) 皆さん売れる商品と言うのだけれども、市場調査とか、そういうニーズ調査というのが余り農協さんも熱心にされていなかったのかな。どこがやったらふさわしいのかな。市で願いますことなのか、その辺は提案の中に、提言の中にポイントとして必要な項目なのかなとは感じました。

(石原洋三郎委員長) ニーズ調査、ニーズ情報の取りまとめのようなところですか。

(佐久間行夫委員) 売れる商品はどうやってつくるか、その市場調査というか、マーケティングというのは意外と、菅田副委員長さんも質疑したけれども、何かちらっとかわされて、ちょっと期待不足だったかと思って感じましたけれども。

(黒沢 仁委員) あと、6次化してできた商品も、今山岸さん言ったとおり、このワインではうまくないとか、そういったでき上がった商品の評価という部分もしっかりやっぱりリサーチしながら進めていくということも大切なんでしょうね。試作品つくって、うまくないものをたんとつくってしまったのでは何ともしようがないのだから、そういったやっぱりなるべくリスクの少ないような状況で6次化をやっぺいかななくてはならないのかなという思いもあります。

(佐々木優委員) 売れる商品づくりというのはいいと思うのですが、多分それというのは、それぞれの好みとか嗜好があるのもあると思うのです。だから、いわゆるストーリーづくりとか、福島のものはいくようなものなのだよという何か特徴とか、それが特徴なのだよという意識づけをすることのほうが、おいしいにこしたことはないと思いますが…。

万人受けするような商品をつくるということも当然なのですが、なのですが、でもやっぱり福島市の中でつくられたものをみんなで消費しようねというその心構えみたいな、心構えと言われても買う人はみんなそれぞれだから、いろいろだと思うのですが、地産地消を福島市も進めるというスタンスは必要なのではないかなと。だから、そのためにはやっぱりそういういろんな味があるかもしれないけれども、これが福島市でとれた農産物なのだよという意識づけができるようなこともあっていいのではないかなというふうに思います。

(石原洋三郎委員長) 一応所管事務調査のまとめの中でそういった意見を取りまとめていきたいとは思っているのですが、一応JAさんの参考人招致の中で、この意見開陳のご意見をちょっと挙げていただければとは思っているのですが。

(佐々木優委員) あっちこっち行ってしまいましたね。済みません。

(石原洋三郎委員長) もちろんおっしゃるとおりなのですが。

ほか、この資料1に関して何かございますでしょうか。

【「なし」と呼ぶ者あり】

(石原洋三郎委員長) ほかになければ、最後に参考人招致意見開陳のまとめに入りますが、資料1の2ページの一番下をごらんいただければと思います。

今回の意見開陳でもさまざまなご意見をいただきましたが、それらをまとめさせていただきますと、JAの取り組みを聴取して、まず1つは、JAとしても、つくった商品を売るのではなく、売れる商品をつくる、先ほど来お話しいただいておりますが、売れる商品をつくるのが大切という話があり、6次化の推進には、これまでの調査結果と同様、事前のマーケティング調査が非常に重要であることを再認識できたかと思っております。ニーズ調査という部分にかかわってくるかと思っておりますが、再認識できたのではないかと思います。

2つ目に、JAの6次化推進の立ち位置ですが、JAの6次化の取り組みとしてはさまざまな商品を開発し、広報や販路なども独自の展開をしているところではありますが、JAとしてはあくまで生食が主でありまして、正規品として6次化商品に組み込み、産業化を目指すという視点ではないという

ことが明らかになったと感じております。

したがって、本市としては、JAの6次化の取り組みに乗ってJAを直接支援するというよりは、JAの持つ農業者のニーズ情報や6次化商品の販売手法、広報などのノウハウを情報共有するという部分で連携しながら、本市は本市で6次化の意識の醸成や取り組みやすい環境の整備、マーケティング調査の実施などを推進していくことが望ましいのではないかとまとめたところであります。今後マーケティング調査の中に先ほど黒沢委員がおっしゃった商品の評価、リサーチというところも入ってくるのかなとは思いますが、これらのようなことで、このまとめについて、委員の皆様から何かご意見ございますでしょうか。

(佐久間行夫委員) このとおりだと思うのですがけれども、福島市で6次化やって、地産地消と言うけれども、地産地消だと、福島の人って、こんなもらって食うもので、買って食うものでないでしょうという考えの人がほとんどで、高く売れないのね。その成功事例は、俺、高知県の馬路村に行ったの。ごっくん馬路村というの、聞いたことあるかもしれないけれども、その辺の、余りいいあちは農地がなくて、その辺のおばちゃんたちが汚いユズ、いっぱいつくったやつを搾って、それを瓶に詰めて、東京に農協の職員が何回も何回も高く売れるところを見つけて行ったらば、コップ1杯なちっちゃいごっくん馬路村が今3億円を超えるような、農協がその工場をつくって、おばちゃんたちから5倍も6倍も高くユズ買って売れるような、だからやっぱり熱意のある人が農家さんにもいないと、地産地消、地産地消と言っているとありがたみがないし、だってモモだって福島でモモ食うよりは、北海道の人が食ったほうが高級になるし、ないところの産地の人に売らなくてはいけないということだから、そういうことで、地産地消という考え方もあるけれども、さらに外へ出て行って、売るために誰が仕掛けていくかというのは、農協も考えなくてはいけないのだなと私も思って、そこで期待外れだというふうに思うので、やっぱり高く売れる、売れる商品というのは、そういう価値を認めている地域に出ていかななくてはいけないのかな。あと、お金持ちのところに行かないと、地産地消って、福島では大体もらって食うのはだめだという感じがするので、そういう見方もやっぱり大切ではないのかな。成功事例、日高川のミカンのジュースとか、ポンジュースなんかもそうですし、いろんなものがあるので、そういうのもやっぱり参考にすべきでないかなと思うので。

(山岸 清委員) では、俺も参考に1点。NHKの職員かな、福島でリンゴうまいから、鹿児島に転勤になったのだと。そして、鹿児島にリンゴを送ってもらって、隣近所に配ったら、うまい、うまいと言うから、次の年、また今度余計送ってもらって、そして鹿児島で配ったら喜ばれた。最終的には貨車便で送ってもらって、配ったと言うのだよ。やっぱりないところ、食ったことないところにやれば効くのだよね。ただ、ベトナムあたりに行ってリンゴをむいたら、中に蜜あったら腐っていたなんと言うから、やっぱり食い方もよく教えないと、ふじリンゴの蜜が腐っているというあれになるというのだ。やっぱり食べ方とか価値をよく教えて、そして食べさせれば、やっぱりリンゴは大したものだと思うよ、俺。だから、やっぱり今佐久間さん言ったように、私の家だってモモなどは、私の妻の

実家、保原だったから、モモなんて買って食ったことない。もらったやつのお裾分けで。だから、やっぱり高級に売れるところに、ただモモは傷みが早いから、リンゴと違うのだ。リンゴは、結構遠くまで持っていけるから。

(石原洋三郎委員長) ほかごございますでしょうか。

そうすると、委員会としてのJAのまとめとしては、できた商品の評価、リサーチとか、あと新規市場の開拓ということですかね。高く売れるような調査もしていくといたしますか、実施していくことが望ましい……。

(後藤善次委員) 6次化にかかわらずになってしまうのだな。6次化だから、そういう方法なのかという。6次化ではなくてもそうだよな。

(石原洋三郎委員長) そうですね。

(山岸 清委員) やっぱり基本は基本なのだよ。

(渡辺敏彦委員) 基本は、売れるものをつくると言ったらば加工でも何でも同じなのだろうな。というのは、さっき佐久間委員のほうからあったように、結局生食で安いものというのかな。だから、おいしくても、さっき言ったユズとか。モモなんて加工にしているのって多分熟して一番うまいものなのだよ、多分。だから、うまいのだよ、多分。でも、格別のものをどうするかと考えなければならぬいから。あるいは、どうつくってもこの福島ではきれいになって生では売れないよ。それは、加工したらおいしいのだけれども、だから加工にして産地化するのだったらいいのだけれども、売れるものをつくらうといたら生で出してしまうものね、普通。だから、何かそこら辺の開拓というのにも必要なかもしれないよ。福島にあって、生では商売にならないけれども、加工したら商売になるものって何かあるかもしれないし、モモなんて完璧に缶詰屋さん持って行ってつくったほうが甘くてうまいものね。だから、その辺は微妙なところなのだ。

だから、やっぱり生、生食で安いもの、格別のものをどうするかを考えていくしかないのではないの。あとは、参考人招致のとき、ここに出ていたやつだと、本当に生よりも高く手かけた分売れなかったら何にもならない、やっていることないのだから、これは。ということを考えれば、それでは相乗効果でこっちも引き上げるためにやろうと思ったら、その部分の付加までつけてもらわないと困るのだよね。

(黒沢 仁委員) 3倍だろうな。

(渡辺敏彦委員) こっちは安くてもいいのだ。うんとうまいから、今度生のほうが、生はもっとうまいのだろうとかと思う人がいて、この値段が上がってくればいいのだけれども、その辺の仕掛けというのは多分難しいと思うのだけれども。

(黒沢 仁委員) 難しいね。

(渡辺敏彦委員) 難しい。売れるものをつくりましようと言ったら、本当に何でもそうなのだ。そして売れるものをつくるにどうするかと考えなかったら、売れるものをつくらなくてはならないとい

うのを言うけれども、どうすればいいのだって。

(山岸 清委員) 農協の品質改良人に頑張ってもらおう。

(渡辺敏彦委員) 売れるものをつくれればいいのだって、そうだねというのでは、どうやってつくるのだという話になるから。おいしくなければならぬし、値段も安くなければならぬ。値段高くては売れないのだから、価格の部分についてもやっぱり考えなくてはならぬのだ。値段安くなければならぬのだから。売れるものって。おいしくたつてうんと高ければ買わないし、値段もやっぱりある程度下げなくてはならぬから、売れるものって。その辺も考えてください。

(斎藤正臣委員) J Aさんとかかわりの中で考えたときに、大笹生道の駅がこれからできて、6次化産業の何か起点になるかもしれないとは思うのですけれども、こらさんとどういうふうな差別化を図るかだと思ふのです。この委員会のまとめであった6次化の意識の醸成や環境の整備、マーケティング調査というものをその道の駅でやるようにしていくのかどうかはわかりませんが、こらさんと同じことをやっただけでやっぱりしようがないわけで、そこで連携はしていくけれども、そこで6次化をやっている農家さんにもっとこういうふうなことができるということを行政のほうでできればいいのかなとやっぱり思いますし、そんなところですかね。というふうに思いました。

(石原洋三郎委員長) こらさんと差別化を図りながら市としても取り組んでいくということですね。

(黒沢 仁委員) 今道の駅の話出ただけけれども、やっぱり山形なんていうのはいわゆる加工場をつくって、その加工場を、目に見える場所で6次化がされているのだよね。そういった商品がまた店頭で今度並んでくる。やっぱり大笹生の道の駅もそういった加工場とか何かつくって、そこで6次化をしながら福島のPRに結びつけられればいいのかな。

(石原洋三郎委員長) それでは、一応そこは最終的に委員長報告のまとめの領域にも入ってきているところがありますので、J Aの参考人招致のまとめについては、皆様方のご意見いただいたので、それを反映しながらまとめさせていただくということでよろしいでしょうか。

【「異議なし」と呼ぶ者あり】

(石原洋三郎委員長) それでは次に、委員長報告についてを議題といたしたいと思ふます。

前回の参考人招致を最後に、6次産業化についての所管事務調査を委員長報告という形でまとめていく作業に入っていくわけでありましたが、資料2をごらんいただきたいと思います。まず、簡単にこれまでの調査経過を振り返った形で資料がまとめてありますけれども、振り返っていきたく思ふます。今回の調査は、平成29年10月2日に委員会で正式にテーマを決定し、10月25日から調査をスタートしております。平成30年5月7日、本日時点で12回の委員会を開催しており、調査の主な内容としたしましては、当局説明を平成29年11月16日に実施し、1回、現地調査を四季の里農産加工館産品開発室ということで平成30年1月15日実施し、1回、参考人招致を平成30年1月17日に福島県農林水産部、1月29日にふくしま地域産業6次化イノベーター、横田さん、4月23日にJ Aふくしま未来、菊

田さんということで計3回、行政視察を平成30年2月5日から7日の2泊3日を実施し、豊橋、神戸、京都、堺の4カ所を視察している状況であります。振り返ってみますと、かなり多岐にわたりさまざまな調査を実施してきたのではないかと感じておりますが、この資料2について、皆様からご意見がございましたでしょうか。やってきたことの整理ということです。

(後藤善次委員) ちなみに、この④の行政視察は4カ所行っていて、これ1回とカウントするのですか。何かテーマがみんな4カ所とも違うのだし、これは4回とにならないのですかと思ったのですけれども。全部同じテーマなら1回ということもあり得るかもしれないけれども。

(石原洋三郎委員長) 行政視察1回実施、4カ所。この考え方は……。

(黒沢 仁委員) 4回実施とは言わない。

(渡辺敏彦委員) 違う、違う。参考人によってテーマが2つも3つもあるのがあるでしょう。その理屈を考えれば1回。

(後藤善次委員) なるほど。1行程だ。別にいちゃもんつけているわけではない。

(石原洋三郎委員長) 今までも1回というような考え方でやっているそうですから。

ほかございますでしょうか。

【「なし」と呼ぶ者あり】

(石原洋三郎委員長) ほかになければ、このような経過で調査を実施してきたということを委員長報告の導入部で触れていきたいと思えます。

次に、資料3をごらんください。委員長報告の構成について(案)ということで、今回の委員長報告の大まかな構成について確認していただければと思います。先ほども資料2で確認したとおり、ボリュームのある調査を今回実施してありまして、委員の皆様からはそれに係る膨大なご意見や提言に結びつくようなキーワードをいただいております。それらを整理して、できるだけ多くの意見を生かし委員長報告を作成していくためにも、正副委員長といたしましても記載のとおり大きく5つに分けて作成していきたいと考えており、特に3番の本市の総合的な課題及び支援の基本的方向性という部分を市への提言の前に置いて、①、本市の取り組みの現状を踏まえて委員会が導き出した本市の総合的な課題、②、調査で明らかになった6次化商品の一般的な特性と、それらを考慮して委員会が導き出した今後の支援の基本的方向性ということで一旦大きく整理してから提言につなげていきたいと考えております。

なお、この部分の内容についてはこの後協議、確認する予定となっておりますが、次回は、資料の一番下に記載のとおり、提言の内容についてを協議していきたいと考えております。

委員長報告の構成と協議のスケジュールについて、皆様から何かご意見ございますでしょうか。

【「なし」と呼ぶ者あり】

(石原洋三郎委員長) なければ、このような形で調製を進めていきたいと思えます。

次に、資料4をごらんいただきたいと思えます。委員長報告に向けた本市6次産業化の課題と支援

の方向性の整理ということで、今ほど委員長報告の構成でも確認いたしました3番の本市の総合的な課題及び支援の基本的方向性の内容をどのようにしていくか、確認していきたいと思えます。

まず、本市6次産業化の総合的な課題についてから確認してまいります。資料4です。1番、当局説明から明らかになった本市の取り組みの現状ですが、これらは以前当局説明であった際にも確認しており、それをもとに再整理をしております。参考までに過去の資料を2ページ以降に添付しておりますので、詳細は各自でご確認いただければと思えます。

当局では、平成28年度より6次化推進の専門部署を立ち上げ、記載の各種事業に取り組んでおり、(3)、事業の効果としては、事業を通して6次産業化への意識醸成、意欲ある担い手の発掘と支援、商品開発や販路確保を各分野と連携していくためには時間を要するとして、現在のところ大きな効果は上がっていないということでありました。

また、(4)、事業を通して明らかとなった課題として、当局の分析によると、①、農業従事者の高齢化や人材不足、さらに本市は生の生産、生食が主であるため加工に着手できない。②、6次産業化に取り組むための情報、必要な知識、技術、施設が不十分である。③、原材料や1次加工品を供給する農業者とその原材料を加工、販売する商工業者の情報が乏しく連携できず、商品化しても販路が確保できない。④、四季の里農産加工館の利用者ニーズの多様化に対し、加工設備の老朽化及び不備により、商品開発としての対応が困難となっている。レシピが多様化しており、それらに対応できていないといったものが現在課題として感じられているという当局の説明でありました。

さらに、(5)、市内他施設の連携状況として、福島大学や市場、大笹生道の駅については、有効活用、連携ができれば6次化の推進に大きな効果をもたらす可能性があるという認識しているということですが、その具体的な連携や協議にまではまだ至っていないということでありました。

最後に、(6)、ふくしま市6次産業化推進戦略の策定ということで、こちらは平成30年3月定例会議中の協議会案件で報告された案件ではありますが、これらを平成30年2月に策定し、平成30年度以降、データベースの構築やマーケティング調査などを実施し、さらに6次化を推進するとしている状況であります。

次に、これらの状況を踏まえ、2番の本市の取り組みの現状から当委員会で導き出した課題であります。当局説明を受けた際の委員の皆様からの過去の意見開陳では、情報収集不足、環境整備が足りていないなどの意見が多数でありましたことから、当委員会としては、今後、本市6次産業化推進戦略に基づき、さらなる6次産業化の推進が期待されるころではあります。6次産業化に取り組んでいくための情報収集、他団体との連携をはじめとしたさまざまな環境整備が不足していることが現時点における本市の総合的な課題とまずは整理してはどうかというのが正副委員長の考えであります。

説明は以上であります。これらについて、委員の皆様から何かご意見などございますでしょうか。

(佐久間行夫委員) この1の(4)の③に書いてあるように、農業者、生産者は、原材料は供給でき

のだけれども、農繁期はもうそちらのほうに手がいっぱい、なかなか6次化なんて考えられないのだよね。逆に、今度加工とか販売するほうも、農家でどれだけのものが供給してもらえるのか、原材料として供給してもらえるか、約制的な、そういうふうな計画がきちんとできていないから、なかなか連携できない。また、農業者は、6次化といっても設備投資や何かを考えると、人力的なこともあるし、予算的なこともあるけれども、資金的なこともあるけれども、その辺の生産者、2次加工者、また流通も含めた連携がうまくいかない限り6次化って前に進んでいかないのかなと感じて、今やっているように、農家の暇なときに自分でつくれる範囲でそれをここに置いてくるのが今のところ精いっぱいの状況なのか、それを産業化とか何かというのは、1次、2次、3次それぞれが連携をとれるように、さっき話したように、そうでないと農業者ばかり頑張れと言ってもできないし、では2次加工者さんにこういうもの、福島にはあるのだから、やれと言ってもつながりがうまくいかないのだなというふうに、まとめとしてそんな感じで、その辺の連携をうまくとってほしいというのが提言として大きいのかな。問題でもあって、提言だと思います。いかがでしょうか。

(石原洋三郎委員長) 生産、加工、販売のほう、連携の重要性。

(佐久間行夫委員) 農業者は、生産するので精いっぱいで、2次加工まではちょっと難しいのかな。ただ、加工するほうだって、ではどれだけ、逆に言って、渡辺委員言うように、はね物がどれだけ出るかとか、どれだけ原材料が供給されるのかというのわからないと実際はできないし、どれだけ製品ができるからというので流通がどうやって売っていこうという話になるのだけれども、根本がそれぞれが別々になっているから、そういうことを話し合ったり、何か6次化としてどこかで情報、京都とか何かでもやっていたみたいに、みんなで連携しながら、データベースも含めて整備していかない限り難しいのかなと感じました。

(渡辺敏彦委員) 発想転換して考えたら、例えばいいものだったら、スイーツコンテストだっけか。ああいうものに出して、うんと高く売ればいいのだけれども、悪いものは商売というか、みんなで作らないで、例えばサンヨー缶詰に出すようなやつを直売所で売ってしまっ、一般市民の母ちゃんらに加工で出すよりも若干高い値段で売ってもらって、一般の人らに加工してもらおう。家で鍋でできるような、そういう指導をしながら、やっとな農家の付加価値というか、金は上がるのね、高く売れば。発想はちょっと変わっていくけれども。だから、そういった方法もあるのでないかな。逆に、一般のお母さん方に加工方法を市として指導していくとか、農協として指導していくかというのもあるのでないの。生産者は、加工するの忙しいからとかと言って。現実的にモモとか何か持っていったって、加工場だってどうにもならなくて、あれストックしておいて、後で加工して出しているのでしょう。であればそのものを、本当に熟していてうまいのだけれども、それを加工品として一般の人に加工してもらって、我が家で食おう。でも、そういうのも発想の転換としては、農家の手取りは若干ふえるのかな。缶詰屋さんに出すよりは。ちょっと大変だかもしれないけれども、腐ったりなんざりして、管理するのが。

(石原洋三郎委員長) 要は調理の仕方をまとめたものを……。

(渡辺敏彦委員) 一般の市民の人に加工してもらってもおもしろいのでないか。そういった指導もどうなのかな。全然発想、別な話だけれども。

(山岸 清委員) 具体的には梅酒なんかそうだよな。梅は生産者だけれども、買って、自分で氷砂糖で。

(佐久間行夫委員) 果実酒もジャムもみんなそうだよね。

(渡辺敏彦委員) そもそも梅酒や梅干しってつくるものだという意識があるからね。今は、買ってきて食べているほうが多い。

(山岸 清委員) だから、それがモモもリンゴもそういう意識になってもらえば、6次化を農家がやらないで、一般市民がやる6次化って。

(渡辺敏彦委員) そういうのも発想の転換として、方向性としてはおもしろいのだななんて思ったのだけれども。

(山岸 清委員) そうすれば、販売なんか考えないで、その時点でもう販売が完結するわ。

(渡辺敏彦委員) 余り言うと、これ根っこからひっくり返るから、そこら辺にしておけ。

(石原洋三郎委員長) 一般市民向けの調理方法の普及ということですね。

(山岸 清委員) ジャムつくりとかな。

(渡辺敏彦委員) 農家の母ちゃんだけでなくてね。

(山岸 清委員) 一般市民にな。

(斎藤正臣委員) この(3)番の事業の効果に関してなのですが、情報収集が不足しているということがこの事業の効果というこの部分にあらわれているのかなと思うのは、6次化産業をやってみましょうと、加工する人をふやしましょうということが何となく目的になっているような気がするのですが、そもそも目的って農家さんの所得をやっばり上げなければいけない、地域の産業を活性化させなければいけないということだと思のです。でも、やっぱり当局は、ではその加工、6次化をやって、一体どれだけ所得が上がるのか、上げるべきなのか、あとはどれぐらいお金がかかるのかということ、そこを把握していないから、もう6次化産業をやる人をふやしましょうということが目的になってしまっていると思うのです。だから、一番最後の6次産業化に取り組んでいくための情報収集が課題だというのは、結局その事業の効果というものを目的がちょっとぶれてしまっているようなことにもつながっているような気がしていて、私は何かそういう部分でもこの情報収集が必要、課題であるということに関して、問題意識をちょっと持ったところでした。

以上です。

(石原洋三郎委員長) 情報収集不足というところは、大きな課題と思います。

ほかございますでしょうか。

【「なし」と呼ぶ者あり】

(石原洋三郎委員長)では、以上のとおり、総合的な課題については、今いただいたご意見も反映しながら整理をしていきたいと思ひます。

次に、資料5をごらんいただきまして、本市6次産業化の支援の方向性についてを確認してまいりたいと思ひます。こちらも以前に確認した各参考人招致意見開陳のまとめをもとに再整理しております。当時の資料は、2ページ目以降に参考として掲載しておりますので、各自ご確認いただければと思ひます。

まず、1番目の各参考人招致から明らかとなった6次化商品の特性についてをごらんください。(1)、6次化商品はロットが小さい、原価が高い、利幅が少ないといった特性があるということで、こちらは福島県農林水産部の石本、岩沢参考人、そして6次化イノベーター、横田参考人からも確認した話であります。それゆえに、6次化商品は、大型量販店の店頭販売にはなじまない、道の駅や直売所での販売が効果的ということで、それを認知させるためにも、まず地元の人たちに愛される商品であるということが必要とのことで以前まとめていたかと思ひます。あと、JAさんの話もあれば、売れる商品ということも入ってくるかなとは思ひますが。

次に、(2)、6次化商品には最上品質の農産物を用い、加工することで、より付加価値を高める取り組み方、そのままでは販売することが困難な規格外の農産物を加工し、形を変えて販売することで無駄をなくすという取り組み方などさまざまな取り組み方法があるということで、こちらは2月28日開催の委員会で、横田参考人の意見開陳まとめの際の議論にあった事項であります。委員会では、どちらの手法、考え方が正しいというものではなく、手法は限定することはなく、取り組みやすい環境を整えていくということが重要であるということで整理をさせていただいております。

次に、(3)、6次化商品で必ず売れる品目、必ず売れる場所を行政のほうから明確に示すということは困難ということで、こちらは福島県農林水産部の石本、岩沢参考人、そして6次化イノベーター、横田参考人からも確認した事項であります。6次化商品は、ターゲットにする年代や性別、デザイン、値段、パッケージ、味や食感、地域性など、さまざまな要因が重なり合い、売れるかどうかが決まるため、生産者がどれだけマーケティング調査などを真剣に行ったかなどが重要で、商品の売れる、売れないは売る側の努力の問題とのことでもありました。

この調査結果を踏まえ、2番の6次化商品の特性を考慮した上で、当委員会が導き出した支援の基本的方向性をごらんください。これまでの調査でも確認した内容でもありますが、当委員会としては、地元の人も多く訪れる市内道の駅や直売所などでの販売を視野に入れ、そこで地域の人たちに愛され認められる、地元の人が語れる自慢の逸品を目標に、6次産業化への機運の醸成や環境整備など、側面的な支援を中心に取り組みを進めていくのが行政の支援として最も効果的であるとまずは整理していったらどうかというのが正副委員長としての考えであり、これらの課題と基本的方向性を踏まえて、具体的な提言を市に対して行う形で委員長報告の調製をしていきたいと考えております。

先ほども新規市場の開拓とか、できた商品の評価、リサーチ、高く売れるような市場の開拓といっ

たご意見もあったところでございますが、以上のことについて、委員の皆様からご意見等ございますでしょうか。

先ほどのJAさんのちょっとまとめのところでももう既にいろいろお話が出てきていたので、皆さんのほうから大分既に出ているのかなとは思いますが。

【「なし」と呼ぶ者あり】

(石原洋三郎委員長) ほかになければ、このような形で、先ほどから皆様からいただいた意見を参考にしながら、まずは整理をいたしまして、次回の委員会で具体的な提言項目の確認を行っていきたいと思います。

そのほかに委員の皆様から何かございますでしょうか。

【「なし」と呼ぶ者あり】

(石原洋三郎委員長) なければ、以上で経済民生常任委員会を終了いたします。

今回は、5月14日月曜日午前10時から908会議室で開催いたしますので、どうぞよろしくお願ひしたいと思います。

午前10時54分 散 会

経済民生常任委員長 石原 洋三郎